

2.2 各学科・科教育改善推進計画の実施状況

機械工学科

教育改善推進計画

学校運営における各学科の教育改善グル - プの組織化

メンバ - (チ - フ豊田、金沢、吉川)

(1) 機械工学科の教育改善体制

JABEE認定に向けた取り組みの体制

総括：豊田教官

外部評価調査グル - プ(チ - フ金沢、北住、宮田、豊田)

教育改善グル - プ(チ - フ豊田、谷口、石井、吉川、谷脇)

シラバス・カリキュラム検討グル - プ(チ - フ吉川、松田、刑部)

(A) 融合複合JABEEプログラムの4月開示に向けて

・2月12日～13日 外部点検評価委員による、点検実施。

評価結果(未入手)を受けて、対策案を検討予定。

・専攻科カリキュラム変更、本科カリキュラム変更、科目系統図の作成、保証時間数の確認、シラバス作成などを実施。

(B) 教育改善に向けた取り組みの体制

具体的な運営重点推進項目

(a) 卒研成果の評価法の見直し。(北住、吉川、松田、チ - フ刑部)

本年度、教育目的・目標に沿って、卒業研究の評価法を検討する。

研究成果(論文、作品等)、研究計画能力、実験・設計製作遂行能力、プレゼンテーション能力および考察能力等の項目を評価に導入することを検討する。

・卒研成果の評価法の見直しを検討した。卒研テーマは、基礎研究、応用研究、技術開発など多岐にわたっており、統一した評価が困難である。来年度は、JABEE学習教育目標のC「工学専門知識を活用し、問題解決に向けて自主的に考え、計画を立案・実行できる技術者の育成」を、どのような評価方法・基準で達成度を評価するかを、融合複合プログラムの他学科と調整し、統一的評価方法を決定する。

(b) 授業改善の推進。本年度には、企業が評価している「高専学生(本科、専攻科)の要件」を知るため、企業アンケートを実施し、改善内容を検討する。

(チ - フ金沢、北住、宮田、豊田)

・学校全体で企業アンケートを実施した。その結果から、学科で意見をまとめ報告した。

(c) 授業科目の学生によるアンケート結果をもとに、各教官、各教科の授業方法を改善。毎年8月末までに前年度実施アンケートをもとに科全体で討議して、各自の目標を実現するための方策を決定して次年度からの授業で実施する。ただし、可能

であれば後期から実施する。(全教官)

・平成14年度専門科目アンケート分析について学科全体で取り組み報告した。

(d) 平成14年度から新カリキュラムとなり、授業・実験・実習等におけるもの作り、および、制御に関する科目の増加により、教育機器を充実させる。(平成15年度において2年生に工学基礎実験、平成17年度に4年の創造設計製作、平成16年度にメカトロニクス基礎、平成17年度にメカトロニクス応用開講予定)(全教官)

・工学基礎実験はすでに教育機器はあり、新カリキュラムを豊田、谷口、北住、宮田、刑部教官で実施した。

・4年の創造設計製作(平成17年度開講)のシラバスを検討し、作成した。

(2) 機械工学科で独自に行う予定の具体的活動計画

(a) (1) の機械工学科の教育改善体制における(B)教育改善に向けた取り組みの具体的な運営重点推進項目(a-d)について実施する。

・運営重点推進項目(a-d)に記述

(b) 公開授業は2年生の工学基礎実験、専攻科の計測制御実習Aで、平成16年1月頃実施する。その後、授業担当者と教育方法について議論し、教育方法を検討する。

・2年生の工学基礎実験の公開授業を実施した。

(c) 教官研修会にはできるだけ参加し、情報を収集する。

・校内で実施した研修会(2004/3/3 高知高専 島内功光先生による「高専教育の発展を目指して」)

・学外での研修会「技術者倫理ワークショップ」に吉川教官参加(資料回覧)

電気情報工学科（電気工学科）

1. 各学科の教育改善グループの組織化について

以下のような委員会、グループを学科内におき、教育改善委員会が中心となり、各委員会、各グループの意見集約を行う。

委員会とグループ

(1) 教育改善委員会

電気情報工学科・電子制御工学科とのカリキュラムの融合について、主として両学科の教務委員が窓口となって両学科の合意を図って推進した。

また、教官ごとにバラバラであったオフィスアワーの日時を毎週集約することについて提案・推進した。さらに、実験の見直しの検討を始めた。

(2) カリキュラム・シラバス検討委員会

電気情報工学科・電子制御工学科とのカリキュラム融合について、電気情報工学科では「半導体工学」を、電子制御工学科では「ロボット工学」と「情報通信システム」を同時開講して、両学科の5年生が受講するようカリキュラムの改訂を検討し、平成16年度から実施する運びとなった。また、他高専の電気情報工学科や情報工学科のカリキュラムやシラバスも調査し、十分とはいえないが資料を集めている。

(3) 教育目標達成度評価委員会

成績評価の妥当性について成績が出た段階で一部議論しているが、細かくは検討していない。教育目標達成度の評価についてはまた検討をしていないので、この一年間のまとめとして年度末に検討を加えていきたい。

(4) 外部評価調査グループ

平成14年度の調査結果に基づき、平成15年度もよく検討を加えて対処すべきであるが、学校としての企業アンケートの結果が出た段階で、企業や卒業生からの評価を検討したい。

今年度は外部点検評価を実施したので、その結果をまとめて来年以降の教育改善に役立てるよう早急に検討していく予定である。JABEEについては、他大学や高専の等の状況を調査して検討を加え、これからの受審に向けて検討している。

(5) 内部評価調査グループ

(a) 在校生の授業への評価・要望その他の意見を調査

平素の学生からの要望や意見は、授業中やそれ以外の場で学生から得られた情報を昼食時に各教官から話題として出されるので、そこで意見交換を行っている。学科として検討する必要のあるものは科会議で議論している。前年度の授業評価アンケートについては、その結果をふまえて授業にフィードバックできるよう努力している。

(6) 自己点検評価グループ

グループとしての提案よりも日々気がつく場面があればその都度提案されているが、これまでグループからの特筆すべき提案はない。年度末に一区切りとして、グループにより一年間をとりまとめた提案を行う必要があると思われる。

(7) インターネット管理グループ

情報処理室の授業への対応を行っているが、一年間順調な対応がなされた。夏季体験学習等のPRページも例年になく充実したものが作成された。目下、来年度の授業に対応すべき準備が行われている最中である。

(8) 教官評価グループ

グループとしてはまだ検討会を持っていないが、年度末に評価会を行い、結果を科会議に出すつもりである。

2. 平成15年度の具体的な活動計画

電気系学科のカリキュラムの融合を検討するため、選択科目を増やし、学生に受講する機会を与える目的で、例えば、電気情報工学科の4年生から導入する電気工学コース、情報工学コースの授業を電子制御工学科の学生が受講できるようにする等電気情報工学科と電子制御工学科の共通の授業科目の設定の検討を開始する。(6月下旬～)

- 2学科で3科目を同時開講することなどによって、受講学生の人数を平均としては2/3に減らすことができるので、少人数教育が可能となる。15年秋から、電気情報工学科と電子制御工学科とで教務委員を介して連絡を取りながらそれぞれの学科で検討を続けてきたが、最初の試みとして、5年次で、電気情報工学科では「半導体工学」を、電子制御工学科では「ロボット工学」と「情報通信システム」を同時開講して、両学科の5年生が受講するようカリキュラムの改訂を行い、平成16年度から実施することになった。近い将来、電気情報工学科が4年次でコース制に入ったときは、さらに他の科目にも適用することが可能となる。これで、学生にとっては科目の選択の幅が広がり、少人数教育の実施も可能となっていく。

教官教授力のスパイラルアップのために、授業参観、公開授業等を実施すると共に学生授業アンケート結果を反映させた授業改善について検討を開始する

1. 6月下旬～7月上旬 授業参観、公開授業
2. 9月中旬 授業参観、公開授業
3. 11月中旬 授業参観、公開授業
4. 1月下旬 授業参観、公開授業

- 公開授業については、7月7日から助手を除いた全員で、各々一科目について、夏休みをはさんで9月11日まで授業参観を実施した。参観の結果は、その週の内に学科会議等で意見交換を行った。また、授業担当者は学科教務委員に実施報告を提出し、参観した教官からはメールで意見を教務委員に送って、検討資料とした。なお、各自の授業との重なり等で参観に参加できなかった教官もかなりあった。計画では年に4回開催の予定であったが、1回と2回を合併して行い、残り2回は実施しなかった。事後のまとめ等を考えると年4回は多すぎるようなので、来年度は2回くらいがよいのではないかと考えている。

なお、本年度は各学科で教官個別の公開授業が行われたので、学科としてはできるだけ1名は参観に出席するよう心がけ、参観の感想等を実施教官にメールで送ることを心がけた。

一方、10月29日(水)は、一日かけて全校で保護者対象の公開授業を行った。1,2年生は混合学級なので学科ごとの集計はできないが、各々合計36名、26名の参加があった。

電気工学科3,4年の保護者は2名ずつ4名の参加があった。5年生の保護者の参加はなかった。この日は4年生の実験が3～7時限に実施されていたので、実験室の一隅に電気情報工学科の相談窓口を開設したが、相談に訪れた保護者はいなかった。学科としては、参観者が大変少なかったことに対して、今後種々の面から検討する必要がある。

在学中に取得する資格認定数を増やすための方策についてのガイドブックを整備する

- ・6月末までにガイドブックを整備、学生へ配布
- ・現在、資格試験受験の指導は、各教官が分担して世話をしているが、学科として統一したガイドブックを作成して指導に当たる。

○ガイドブックについてはこれまでに作成した古いものがあり、それを改良する予定であるがまだ着手しておらず、未達成である。各教官が分担して指導している資料を集約して早急に整備したい。

学生実験内容の整備のために、4年弱電、5年強電関係の実験内容を点検し、見直す

- ・8月末まで
- ・4年弱電の使用テキストがわかりにくいので、わかりやすいテキストを作成する。コース制にわかれた場合を視野に入れて、実験内容の手直しをはかる。

○電気工学実験2後期弱電の実験見直し、テキストの改訂を図る予定であったが、本年度は時間的なゆとりがなくて実現しなかった。電気工学実験3強電関係は前期については、「コンピュータを用いたDCモータの速度制御」というテーマのもと、4つの小テーマを作っているが、これらは昨年着手した新しいものであり、本年はその内容の充足を行い、ほぼ完成した。また、後期強電についても、6項目のテーマの改善を行い、2月には公開授業を行いその成果を報告した。

電気情報工学科PRのために、パンフレットを新たに作成し、中学校、企業へPRを行う

- ・6月中下旬
- ・昨年末に作ったものをもとに、より注目度、印象度の高いものへと手直しを行う。

○電気情報工学科PRのためのパンフレット作成については、中学生用学校説明会資料「はばたけ未来へ」の電気情報工学科のページを大幅に改訂した。なお、新たに別のパンフレットを作る計画であったが、それはできなかった。

電気情報工学科のWebページを点検し、見直す。

- ・6月下旬～8月上旬
- ・電気情報工学科の内容の充実を図る。Webページ更新体制の強化。教官個人ページの整備

○電気情報工学科のWebページの点検・見直しについては、大幅な改訂はしなかったが、全体的なデザインの変更、教官一覧表の体裁の変更、夏季体験学習ページの追加等を行った。全学的に「研究者総覧」ページが設置されたので、これから教官個人ページの整備を進めたい。

○ 総括的な評価と課題

教育改善グループの組織化を行ったが、このグループがそれぞれに独立して動くというよりは、全体的に動いてきたという感じである。したがって、各グループごとに成果のとりまとめを行うことは難しいことであった。

本年度の大きな改善点は、授業外に学生の学習習慣をいかに付けさせるかということテーマに、検討を加えて実現したことである。各教官のオフィスアワーを集約し、学生にとっては週二回オフィスアワーがあるということになり、そこへ学生が自主的にできるだけ多く集まって復習や予習、課題作成ができるような体勢を作った。このために科会議を週一回余分にとって検討を続けてきたが、今その体勢がスタートしている。これをうまく軌道に乗せ、学生に課外学習の雰囲気醸成するには、今後さらに努力が必要であるが、改善しながら発展させていきたい。

もう一つの課題として創造性を養うための実験の改善を検討しているが、これも早急に進める必要がある。

今後、授業アンケートをもとにした授業改善がどのようになされているか各教官からの経過報告と、それに対する検討を行う必要がある。それによってさらなる教育方法の改善を進めていきたいと思っている。今後、もう少し教育改善グループの動きを活発化させ、お互いのグループを関連づけたシステムとして動かしていく必要がある。

電子制御工学科

1. 電子制御工学科の教育改善体制と活動内容

(1) 教育改善委員会（田中（主任）、深山、今井、榊原（副主任）、山田）

審議・活動内容

- (a) 教育改善の基本方針に関すること
- (b) 教育改善に係る環境の整備充実に関すること
 - ・ LabVIEW および NI-ELVIS を基礎工学実験室に導入。
 - ・ 基礎工学実験室のパソコンに高速 A/D 変換ボード、および、プリアンプを装備。
 - ・ 基板加工機のソフトの最新バージョンを導入。
 - ・ 卒業研究・特別研究のための研究用備品整備費を主任裁量経費から、若手教官に重点配分した。
- (c) 教育施設の管理運営に関すること
- (d) その他、教育改善に必要な事項

(2) シラバス・カリキュラム検討委員会（*田中、栗原、出口）

審議・活動内容

- (a) カリキュラムおよびシラバスの基本方針に関すること
 - ・ カリキュラムの改訂について検討した。下記(3)参照
- (b) カリキュラムおよびシラバスに係る環境の整備充実に関すること
 - ・ 平成16年度シラバスの電子制御工学科本科科目の学科内検討会を開催カリキュラムに関して検討を行った。
 - ・ シラバスの HP 登録用システムの（学科内向け）を整備した。
- (c) その他、カリキュラムおよびシラバスに関する必要な事項

(3) 自己点検評価委員会（*深山、松村）

- (a) 自己点検・教育改善のための提案を行う。
 - ・ 次の内容の提案を行った。
 - 変更前：後期、「情報通信システム」1単位（栗原）および「ロボット工学」1単位（山田）ともに必履修
 - 変更後：後期、「情報通信システム」1単位（栗原）,「ロボット工学」1単位（H14年度の自己点検結果に基づき,本年度は以下の教育改善を提案し, H16年度以降のカリキュラム,シラバスに反映させた。

1. 5D「情報通信システム」および「ロボット工学」

1.1 改善にいたる経緯

点検報告書（H14年）のアンケート結果に「授業が面白くない」との学生の声があり、自己評価書（H14年）には、今後の課題として「電気・電子教官が共同して選択科目を増やす」との方針が示された。そこで、8月以降の学科会議による

協議により、改善方針を決定した。

1. 2 変更点山田), および「半導体工学」(E 科, 尾西) の 3 科目のうち 1 科目選択
1. 3 変更の狙い
既に、進路や関心ある技術分野が明確化している 5 年後期において、情報通信分野、メカトロニクス分野、電子デバイス分野から選択させて、高度な内容を教授する。
2. 5 D 「経営工学」
 2. 1 改善にいたる経緯
学生のニーズに応じた少人数、大人数授業の必要性が指摘され、その試行の一環として 11 月以降、学科会議および教務委員会での協議により改善方針を決定した
 2. 2 変更点
変更前：後期、1 単位、電子制御工学科のみで授業
変更後：後期、1 単位、電気情報工学科と電子制御工学科とで合同授業
 2. 3 変更の狙い
新設の科目において、2 学科共通の一斉講義を行い、授業への十分な準備の時間を確保する
3. 1 D 「電子基礎実習」
 3. 1 改善にいたる経緯
点検報告書 (H 1 4 年) のアンケート結果に「授業が面白くない」との学生の声があり、自己評価書 (H 1 4 年) には、今後の課題として「低学年時からの専門分野への意識付の必要性」との方針が示された。そこで、8 月以降の学科会議による協議により、改善方針を決定した。
 3. 2 変更点
変更前：通年、隔週、1 単位 (出口, 榊原)
変更後：通年、隔週、1.5 単位 (出口, 榊原)
 3. 3 変更の狙い
低学年時にあって、専門分野や将来の進路への興味を喚起するとともに、併せて、専門分野への基礎となる低学年での科目履修の意欲を増進させる。具体的には、全テーマについて「解説」を 1 時間程度に増加するとともに、後期に 1 テーマ追加する。
4. 1 D 「情報基礎実習 1」
 4. 1 改善にいたる経緯
点検報告書 (H 1 4 年) のアンケート結果に「授業が面白くない」との学生の声があり、自己評価書 (H 1 4 年) には、今後の課題として「低学年時からの専門分野への意識付の必要性」との方針が示された。そこで、8 月以降の学科会議による協議により、改善方針を決定した。
 4. 2 変更点
変更前：通年、隔週、1 単位 (榊原, 占部)
変更後：通年、隔週、1.5 単位 (榊原, 占部)
 4. 3 変更の狙い
(改善の狙いと内容)

低学年時において、専門分野や将来の進路への興味を喚起するとともに、併せて、専門分野への基礎となる低学年での科目履修の意欲を増進させる。具体的には、通年で5テーマを追加する。

(4) 教育目標達成度評価委員会（*榊原、白井）

審議・活動内容

(a) 成績評価の妥当性に関すること

(b) シラバスに記載された評価方法の実施状況に関する事項

(c) その他、教育目標達成度の評価に関する事項

・シラバスに記載された評価方法の実施状況の調査は 3/10 の学科内シラバス検討会の際に行う予定。

・その他、教育目標達成度の評価に関する事項としては、将来、問題解決能力や創造性を卒業研究の評価に加えるために次のような方法で試行を行った。今年度の卒業研究発表会では、「問題解決能力がついていると評価できる発表」と「オリジナリティのある着想や工夫がある発表」にマークをするという方法で評価した。その結果、2名以上の教官が「問題解決能力」が身につけていると評価した発表が 34 件の発表中、15 件あった。また、「創造性」が発揮されていると判断された発表が 4 件あった。

(5) 外部評価調査委員会（*山田、栗原）

審議・活動内容

(a) 企業・大学・卒業生からの評価・要望その他の意見を調査

(b) 他大学、高専の審査状況の調査

・平成 16 年 2 月 17、18 日に外部点検評価委員会の外部評価を受けた。

(6) 内部評価調査委員会（*今井、占部）

(a) 在校生の授業への評価・要望その他の意見を調査

(b) 学生支援活動を通じた、学生の要望その他の意見の調査

2. 今年の学科・科で独自に行う予定の具体的な活動計画

(1) 公開授業の実施予定

電子創作実習 4D(コンテスト)を16年の2月中旬に公開する

電子基礎実習(1年生)と情報基礎実習を12月に公開する。

・授業参観日に電子創作実習 4D を 4 月に公開した。(出口、白井)

・電子創作実習 4D(コンテスト)を平成 16 年 2 月 25 日に公開した。(出口、白井)

・電子基礎実習(1年生)と情報基礎実習を 12 月 8 日に公開した。(榊原)

(2) 研修会等への参加

・ 8 月新任教官研修受講。

・平成 15 年度工学教育連合講演会(6.15)に参加

・高等専門学校情報処理研究委員会第 23 回研究発表会

・電子情報通信学会主催の J A B E E 自主研修会(3/6, 7)に出席

・3月4日～5日 LabVIEWBasicsII コース受講

実施状況とその成果

1 生物応用化学科の教育改善体制

学科内の教育改善に向け、1) 教育改善委員会、2) カリキュラム・シラバス検討委員会、3) 教育目標達成度評価委員会、4) 内部・外部評価委員会の各委員会を設置する。統括は教育改善委員会が行う。

1) 教育改善委員会（河村、中山、早瀬、衣笠、勝浦、間淵）

(1) 各委員会、JABEE関連の年間計画を立案する。

各種委員会および JABEE 受審に関する計画を立案し、ウェブ上の「掲示板」に掲載した。

(2) 各委員会に年間実施計画を提出させる。

各種委員会は年間実施計画を立案し、ウェブ上の「掲示板」に掲載した。

(3) 各委員会の委員長会議を月 1 回定例に開催し、実施状況を把握し、調整・指示を行う。

委員長会議を 2 回開催したのみであり、各委員会に対し十分な調整・指示ができなかった。

(4) 各分野における各学年の学習到達目標を設定する。

各科目について、カリキュラム・シラバス検討委員会によるシラバス内容の検討に留まり、実力試験の実施や一般・数理科の科目担当教官との検討による到達目標の設定はできなかった。

(5) FD活動を推進する。

- ・各教官に授業のビデオ撮影を行わせ、報告書を提出させた。それを基に平成 15 年度授業改善に関する重点目標を設定した。
- ・教官研究集会や公開授業に教官を参加させた。
- ・夏季休業中を利用し、各教官の授業方法についての報告会を実施する予定であったができなかった。

2) カリキュラム・シラバス検討委員会（衣笠、早瀬、中山、勝浦、間淵）

(1) 各科目のシラバス内容の検討、演習科目についてのシラバスの作成は実施した。

(2) 生物応用化学専攻分離に伴うカリキュラムの変更等の作業のため、学習到達目標のレベル設定はできなかった。

3) 教育目標達成度評価委員会（真鍋、杉本、牛尾）

(1) 特別研究について適切な評価を行なうため、専攻科 1 年生に、年 2 回の中間レポート（A1 用紙 2 枚にテーマ、研究目的、実験方法、結果と考察、今後の方針を記載したもの）と英文要旨（中間英文要旨は 100 words、1 年次の期末中間英文要旨 200

words 程度)を提出させ、評価を行なった。

- (2) 実力試験の目的、実施方法、評価方法についての議論はできなかった。
- (3) (2)についての議論ができておらず、本科生、専攻科生に実力試験は実施できなかった。
- (4) キーワードを含んだシラバスの作成について教育改善委員会へ提案があったが、委員会において検討できなかった。

4) 内部・外部評価委員会(杉本、真鍋、牛尾)

- (1) 前期中間試験後に学生の要望に関するアンケートを実施し、アンケート結果をまとめた。
- (2) 授業風景のビデオに関する各教官の意見をまとめた。
- (3) 外部評価を実施できなかった。

2 活動計画

ビデオによる授業改善研究

日程どおり、各教官の授業のビデオ撮影を行なった。各教官は自らのビデオをみて、問題点、改善点を内部・外部評価委員会に提出した。得られた意見を教育改善委員会でまとめ、1) ひとつの話の説明の後に十分間をとること、2) 字を大きく書き、強調部分には色チョークや下線をつかうなど、板書に工夫を加えること、3) 書きながら話すのではなく、板書後の間を十分にとってから話すことを本年度の授業改善に関する重点目標として決定した。

学生の要望に関するアンケートの実施

前期中間試験後に学生の要望に関するアンケート実施した。記述式で行なったためか、あまり記入されておらず、まとめることはできなかった。

授業アンケートに基づく改善

授業アンケート結果に基づき各教官が提出した改善策を教育改善委員会においてまとめた。しかし委員会における再検討、および改善策の提案はできなかった。

総合的な評価と課題

各委員会において年間実施計画を立てたにもかかわらず、実施できなかった項目が多かった。原因は教育改善委員会内での議論のほとんどが JABEE 受審に関連したものとなってしまったこと、および教育改善委員長(主任)が月1回の委員長会議を開催せず、各委員会の活動を統括できなかったためである。

実施状況とその成果

1. J A B E E をにらみながら、次の6つの小委員会を設け活動を開始している。
 - (1) 教育目標 (曾我部、高橋、新田、志賀) 印：チーフ
 - ・材料工学科教育目標の設定。
 - ・JABEE基準1に対する学習・教育目標の設定。
 - (2) カリキュラム (新田、曾我部、高橋、志賀)
 - ・現状カリキュラムの学習時間の調査
 - ・H16年度以降のカリキュラムの検討
 - (3) シラバス (相根、池内、谷、松英)
 - ・H15年度シラバスの確認
 - ・H16年度シラバスの検討と確認
 - ・教育目標，カリキュラムについては，JABEE 推進グループの進捗にあわせて，十分な検討を重ね，まず教育目標を決め，それを達成するためのカリキュラム系統図を作成した．それらをもとに，H16 年度以降のカリキュラムの変更について検討し，結論を出すに至った．
 - ・シラバスについては，H15 年度分の本科および専攻科の全科目のシラバスについて検討し，内容，表現の統一など改善点を拾い出した。これらの検討項目は，H16 年度分に反映させる。また，他高専や大学のシラバスを参照し，本校のシラバスとの比較、検討を行った。
 - ・目標を設定し，目標に沿ったカリキュラムの検討（変更）ができた．
 - ・シラバスについてもいくつかの改善ができた．
 - (4) 外部評価調査 (志賀、谷、相根、松英)
 - ・最近の卒業生に対する正直な評価の聞き取り調査
 - ・13社の企業と4名の卒業生から聞き取り調査を行った。
 - 今回調査した企業の多くは、(新居浜)高専卒業生を高く評価していること、また、「専門基礎知識をしっかりと身につけ、自ら考えられる能力を持った学生」を希望していること。さらに、コミュニケーション能力の向上や精神面の鍛錬に寄与することから「課外活動を重要な位置づけにしている」ことが明らかとなった。
 - 卒業生の意見は母数が少ないので一般論としては扱えないが、MS-Word, Exel 等の市販ソフトを使いこなせるようになっておきたかったこと。また、企業の第一線で働いている人の講義には心動かされるものがあったようである。
 - ・アンケートとは違った正直な聞き取り調査ができ、それなりの成果は得られたが、母数が少なかった。
 - ・H16年度は年度当初から全教官が取り組みたい。

(5) 教育改善 (池内、松原、朝日、日野)

- ・現状調査 2.
- ・公開授業、教授方法改善の計画・実施 2.
- ・達成度評価の方法
 - ・達成度評価の方法は基本的にはシラバスに記載とおりの評価方法で良いと考える。一方、到達レベルの設定や評価方法の妥当性に関わる問題がある。シラバスに記載された評価方法の実施状況を検討するため、授業アンケートの「4.シラバスとおりの評価か」について分析した。この項目4は2.で述べる授業アンケートの分析には含めていない。項目4を数値化した結果は、全体的に低い値であったが、授業アンケートの分析結果と相関が認められ、学生評価の高い授業は項目4が高得点であった。なお、「シラバスの内容を知っている」とした学生は平均として25%に満たないことは問題点である。
 - ・到達レベルを適切に設定し、評価方法が妥当であれば、授業アンケートによって達成度の一部を評価できる。

(6) JABEE現状調査(新田、曾我部、志賀)

- ・他高専、大学のJABEEへの取り組み状況調査(M科と共同で調査)
- ・M科の先生と共に宮城高専へ調査に行った。

2. 公開授業等の実施

- ・H14年度の授業アンケートを分析し、問題点を洗い出し、改善策を検討する。
 - ・学生評価の高い授業科目について、公開授業を行う。
 - ・ビデオによる授業の公開と教授方法の研究を行う。
 - ・授業アンケート分析のため、アンケート結果を数値化し、学生評価の高い授業について公開授業を行った。
- アンケートの設問10項目の内、評価項目を授業に直接関連する6項目として満点600点から最低-600点となるよう数値化した結果、評価点数は417～-194(平均点129)の範囲で分布した。この内、材料加工学(417点、谷教官)と材料力学(397点、志賀教官)を公開授業とした。前者はパワーポイントを主体とする授業、後者は板書を主体とする授業である。
- ・公開授業の感想や意見を収集し、学生評価の高い授業を分析した。
 - ・材料力学の公開授業をビデオに収録し、授業参観できなかった教官も視聴して、教授方法を分析した。
 - ・アンケート結果を数値化することによって授業を定量的に評価できた。
 - ・公開授業参観およびビデオ視聴した教官全員が見習うべきところを捉えた。
 - ・2つの公開授業に共通する点が多く、授業の進め方、授業の良いところ等を2ページ(A4)にまとめ、各教官の授業改善に活用できるようにした。

3. 成績不振者のフォローアップ体制の構築

- ・H14年度の勉学アンケートを分析し、材料工学科の問題点を洗い出し、対策を検討する。
- ・オフィスアワー、アドバイザーを有効に利用する方法を検討する。
- ・学科独自の補習授業を検討する。
- ・2年次に工学基礎学力の確認を組み込む事を検討する。

- ・ H 1 4 年度の勉学アンケートを分析し，材料工学科の問題点を洗い出し，対策を検討する。
 - ・ 勉学アンケートの結果については他学科との比較をするに留まった。すなわち，宿題やレポートは「他人のものを参考にする」，「丸写しにする」学生が両者で 5 3 % で材料工学科が最も多い。また，1 日の勉強時間「ほとんどしない」学生が 6 9 % で材料工学科が最も多い，など問題があるが，これらの結果は機械工学科の結果と酷似しており材料工学科特有の問題点ではないと考える。なお，アンケート結果全体において機械工学科と材料工学科の分布に似通ったものが多いが，「自分の将来に明るい希望を持っていない」学生は，材料工学科が 3 3 % で最も多く，機械工学科が 1 9 % で一番少ない。
 - ・ 掲示板に掲示し，学生に掲示板を毎日見るように指導し，低学年の専門の授業において，学生にオフィスアワーを利用するよう呼びかけた。オフィスアワーの利用状況を定期的に調査しているが利用者は少ない。また，アドバイザー学生の呼び出しに応じない学生が居るなど，成果は上がっていない。平成 1 6 年度は低学年(1 ， 2 年生)と専門各教官との係わりを深める方策を検討する必要がある。
 - ・ H 1 6 年度以降のカリキュラムの変更について検討し，材料工学の基礎学力を定着させるために，2 年次に「材料工学演習」を導入した。

4 . 学生の個人情報の共有

- ・ 学生の個人カルテの作成を検討する。
 - ・ 教室会議のとき，学生の勉学・生活状況など個人情報を交換する。
 - ・ 学生の個人カルテの作成実施していない。
- 学生に一年間の目標を定めさせ，それをどのように達成するか，英検など各種資格試験に挑戦したか，など統一フォーマットを作成し，アドバイザーが学生を引っ張るように指導することを検討する予定であった。このことに関し，対 J A B E E では，学生が自主的に行動することが必要であり，学生の自主性を育む方策を検討する必要がある。その一つとして，来年度から「課題演習 2」(1 ~ 5 年、3 単位)を設定する。本年度から，材料工学入門(1 Z) や実験・実習にプレゼンテーションを組込んでいるが，学生は失敗を通して自分で考えることの必要性を体験している。このことは授業後の調査による自己評価や感想にも表れている。
- ・ 過去何年かの教室会議に比べて，データは無いが，教室会議のとき，学級担任，学生委員，寮務委員からの学生情報や各教官による学生の授業中の様子などを多く話題にしてきた。
 - ・ これらの成果は明確でないが，受講態度に問題のある学生を注意する場合など，他の授業においても同じような注意を受けたことを併せて注意でき，以前よりも注意の効果があるように感じる。また，教官が学生のことを互いに話題にしていることを学生が知ることの効果もある。今後も続けて行きたい。

5 . 進路指導の強化

- ・ 担任だけでなく，学科として進路指導を強化する方法について検討し実施する。
 - ・ 低学年(1 Z ~ 3 Z) の授業中に本年度の進路状況や卒業生の活躍状況などを話題として取り上げている。
 - ・ 保護者懇談会で，前年度の求人一覧表，過去 5 年間の就職，進学先を配布して，進路決定に対する具体的な意識を高めるよう努力した。また，就職関連本(S P I など) の教室への設置、S P I テスト(性格) の試行等を実施した。(4 Z)

- ・どのような成果があったかについては，調査していない．

総括的な評価と課題

・ J A B E E をにらみながら 6 つの小委員会を立ち上げ，それぞれ一定の成果を上げることができた。しかし，各委員会の連携は十分とはいえず，スパイラルアップを図るよう，各小委員会を取り纏める材料工学科の教育改善委員会を早急に設置する必要がある。（現在の小委員会は教育方法改善委員会に名所変更）。また，学生指導の面から，成績不振者のフォローアップ体制および専門教官と 1，2 年生との係わりの度合いに問題があり，継続して，改善に取り組む必要がある。

実施状況とその成果

1 教育改善推進体制

数学、物理、化学に対応したグループ制

(グループを越えるものについては適宜、主任をチーフとする体制を取る)

数学グループ：川崎(チーフ)、小山、千葉、西谷、柳井、古城、三井各教官

物理グループ：塩原(チーフ)、平木、竹田各教官

化学グループ：新田(チーフ)、柴田各教官

推進体制を整備し、グループごとの小体制をとった。

2 具体的活動計画とスケジュール

数学グループ

(1) カリキュラム・シラバスの内容の検討

・年度の教科の教授法の総括討議

前年度末・年度初めに集中的に討議(非常勤講師を含む) (3月) 4月

三月末、四月はじめの二度にわたり非常勤講師を含め詳細に打ち合わせを行い共通講義の推進体制を整備した。

・適宜、進捗調整、修正等

適宜

各四半期ごとを中心に、進捗調整を行った。

・各専門学科との討議

7月～12月

意見交換と互いの授業への反映

グループごとに適宜行ったが、系統的にまとまった形ではできなかった。

・定期試験検討WG(教科毎)

定期試験前後

共通問題化に取り組む、また、結果の解析・反省

国専協事業成果の「高専数学活用事例集」を活用する。

科目別にワーキンググループを形成し、この単位で試験期ごとに詳細な検討を行った。その結果、共通科目は共通試験をほぼ実行した。数学試験問題では、当校では記述式を主としており、「高専数学活用事例集」はあまり参考にならなかった。結論的にこの項目は一番成果の出た項目である。

・情報教育関係：情報教育センターにメンバーが所属し検討

～3月

情報教育センター主導で検討を行った。

(2) その他

・数学検定WG

数学検定の状況調査（制度の調査、導入校の調査等）と実施上の課題の抽出

～ 9月

実施可能性と実施する場合の実提案提示

～ 12月

（試行：実施可能と判断できた場合、あるいはその判断のため）（年度の最後の検
定チャンス）

実用数学検定試験の調査を行い、H16年度から単位化を取り込み、学校内に周知さ
せ、H16年8月に第1回の団体受験実施の段取りまでこぎ着けた。

・ハンドヘルドコンピューターWG

これまでの利用結果のまとめ、他校での利用状況の調査

～ 9月

導入可能性検討、導入形態の研究（物理・化学や専門教科との関係）

～ 12月

物理・化学の演示授業や実験中心授業への対応が可能と考えられる。

注）ハンドヘルドコンピューターは手のひらコンピューターの意味である。その利用と
しては、

コンピューター室を必要としないコンピューター利用教育ができる。

特に、各種センサー機能を付属させることができその場合は、ハンドヘルド（物
理・化学・工学）の実験室になる。

その中に、代数ソフト「ディライブ」が含まれており、これを数学教育にどう使
うかが課題（既に、米、東アジアでは普遍化しつつあり、また国内でも先端校が
使った数学授業をしている。）

ハンドヘルドコンピューターの数学での活用結果のまとめを行ったが、利用拡大策の
検討までには至らなかった。

物理への利用拡大の検討には入った。

物理グループ

(1) カリキュラム・シラバスの内容の検討

・年度の教科の教授法の総括討議

特に、中学新課程に対応した変更初年度に当たりそのフォロー・アセスメントを十分に
行う前年度末・年度初めに集中的に討議（非常勤講師を含む。）（3月）4月

適宜、進捗調整、修正等

適宜

新1年生からカリキュラム変更を行ったが、教科書もそれに対応して改めた（高等学
校用のものが適していることを確認しそれにした）。新教科書は以前のものと同編集方針
を大きく変えており戸惑ったものの教授法を常に討議しながら、授業を行った。

・各専門学科との討議

7月～12月

意見交換と互いの授業への反映

特に、中学新課程に対応した変更初年度に当たりそのフォロー・アセスメントを十
分に行う。

新1年生のカリキュラム変更、教科書変更に注力した結果、この面に関してはやや不
十分であった。

・定期試験検討WG（教科毎）

定期試験前後

共通問題化に取り組む、また、結果の解析・反省

特に、中学新課程に対応した変更初年度に当たりその対応を十分に行う。

定期試験の共通問題化は完全になされた。

(2) 演示授業の強化

- ・ハンドヘルドコンピューターの導入検討（数学グループと連携し、専門学科とも関連付け）
～ 12月
ハンドヘルドコンピューターの導入の検討を行うためまず教官が試用のため購入した。
- ・教育機器、実験主体教授法に関する情報蒐集と演示授業への取り込み
～ 12月
教育機器、実験主体教授法については、多大の時間をかけて取り組んだが諸般の事情により大きな成果を上げるに至っていない。

化学グループ

(1) カリキュラム・シラバスの内容の検討

- ・年度の教科の教授法の総括討議 - 特に、“イオン”について強化 -
前年度末・年度初めに集中的に討議 (3月) 4月
適宜、進捗調整、修正等 適宜
新1年生については単位増もあり、大幅にカリキュラムの改訂を行った。特に、中学校で割愛された“イオン”について強化した。さらに今までは取り込めなかった“高分子化合物”、“環境化学”も2年生で教授した。
- ・各専門学科との討議 7月～12月
意見交換と互いの授業への反映
適宜各学科と意見交換を行い、カリキュラム変更反映させた。
- ・定期試験検討WG（教科毎） 定期試験前後
共通問題化に取り組む、また、結果の解析・反省
これについては、化学は以前より、2人で検討し、完全に実施している。今年度も同じく完全に実施した。

(2) 演示授業の強化・実験授業の導入

- ・学生実験の導入
計画立案 ～ 6月
設備・道具購入 ～ 9月
実施 : 遷移金属イオンの検出(2年) 後期授業
実施 : 電気分解(2年) 16年度授業
上記については実行し、も実験機器購入などを行って、予定通り16年度実施に向け万全な準備を行った。さらに、1年生については当初予定の2テーマを3テーマに増し実施した。
- ・ハンドヘルドコンピューターの導入検討（数学グループと連携し、専門学科とも関連付け）
～ 12月
化学実験あるいは演示授業にはこのツールは数学、物理の後になると判断し、導入については次年度以降の課題とした。

- ・その他教育機器、実験主体教授法に関する情報蒐集と研究 ~ 12月
「化学と教育」等での化学教育研究の一貫で絶えず情報蒐集と研究を行った。

総括的な評価と課題

項目により実施状況に多少の凸凹があるがコアの計画についてはおおむね達成できたと評価する。

課題： 期限間際の成果出しに追われる印象であった。今後、重点化、軽重アクセントを付ける必要がある。

計画外のワークが多く計画に必ずしも注力しきれなかった。

○ 実施状況とその成果

1. 教育改善推進体制

教科ごとにグループを組む。

英語グループ： 尾崎、鴻上、塚野、野村、野口(正)各教官

国語・国文グループ： 野口(裕)、森長、野田各教官

社会系グループ： 岩倉、板野、谷本各教官

保健・体育グループ： 安藤、今城、尋田各教官

* : グループ長

体制が整い、それぞれのグループはグループ長のもと、教育改善方法を検討し、改善に取り組んだ。

科主任、各グループ長からなる体制を組む。

体制は組んだが、科会議のなかで機能した。

2. 活動計画

英語グループ

・月一回は会合を持つ。

実施状況：4月から2月までで合計25回英語科会議を開催した。

成果：新入学生学力確認試験、公開授業、教育フォーラム、語彙テスト、校内全学年統一英語学力試験、外国人教師を迎えての少人数授業、カリキュラム検討、教育方法改善等について協議・検討した。

評価・課題：英語科としては、今までにない新しい企画にチャレンジし、全般的にかなり満足できる成果を上げられたのではないかと思われる。全学的な協力により、統一学力試験（試行）が実現されたことは、大きな成果であった。来年度は、正に年2回学力試験を実施することに決まっており、さらなる成果をあげるよう努力したい。

・教育方法・内容を検討する。

実施状況および成果：後期には外国人教師を迎え、本科3・5学年および専攻科1・2学年では少人数クラスの授業を実現した。また、TOEICを目指した授業支援ソフトを導入し、授業はもとより放課後での自主的な学習が可能になった。また、教育内容を厳選し、効果的な授業実践を行うよう努めた。

評価・課題：少人数クラスの実現により、以前よりも集中した授業、きめの細かい指導が可能となった。授業支援ソフトを利用した授業では、学生が早く操作に慣れ、自分のペースで学習できるようになることが必要である。また、授業以外で、自主的に利用することを今後奨励する必要がある。

・本校学生の語彙力に関する調査を行う。

実施状況および成果：学生の語彙力の実態を把握し、今後の指導の参考とするため、1年生から5年生まで全学的に語彙サイズを測定するテストを実施した。日本人英語学習者のために開発された語彙サイズテスト（望月正道,1998）を

用い、1・2年生は1,000語及び2,000語レベル、3～5年生は1,000語～5,000語レベルを測定し、語彙サイズを推定した。

今回のテストにより本校学生の語彙力の実態が把握できた。

評価・課題：今後、学生の語彙力に基づいた授業を実践する必要がある。また、さらなる学生の語彙力の養成を図ることも必要である。

国語・国文グループ

- ・活動内容：グループによるFD等の実践
- ・定期試験ごとに会合を持つ

実施状況：定期のものとして4回、おもに下記の目的で会合を持った。

第1回(4月) 電子辞書の授業での使用方法の検討など

第2回(6月) 進捗の確認、今後の授業計画の検討など

第3回(10月) 進捗の確認、今後の授業計画の検討など

第4回(3月) 次年度シラバス、今後の教育方針の検討など

また、この他にも、各学年ごとに細かな打ち合わせが、随時行われた。

成果と課題：進捗(試験範囲)、評価の点で、教官の違いによる差は、最小限に抑えられた。定期的な会合は、有益なものであり、今後も続けたいが、学年ごとの細かな打ち合わせが更に必要であることが確認された。今後の課題としたい。

また、電子辞書の使用については、1年生にアンケート調査を行い、野口裕子教官が、教官会において中間報告を行った。学生も教官も電子辞書を使いこなす勉強が必要であることが確認された。

- ・教授内容の基本的な統一を検討する

実施状況:今回、1、2年生において、試験期ごとの教授内容(範囲)については、ほぼ統一がなされた。また、古文、漢文の内容統一について検討した

成果と課題:細かな点(どこまで深く教えるかといった点)については、各教官に一任されている。教官の特徴(専門分野の違い)を活かす上でも、これは、無理に統一する必要はない、と現在のところ判断している。無理な統一は、教授内容の低下を招く恐れがあるからである。今後の課題とする。

- ・シラバスの内容を検討し、改善をはかる

実施状況：平成15年度1年生からのシラバスは、1、2年で同じ教科書を用いることから、2年間の周期で改定を加えるという方針が今回決定した。

成果と課題：ただ、平成15年度1年生の授業において、実際にはシラバス通りにはいかなかった点も多少あった。今後の課題としたい。

- ・それぞれの教育改善のための工夫を持ち寄り、互いの教授能力の向上に努める

実施状況：教材研究の過程において、随時なされた。補助教材(プリントなど)の効果的なもの、あるいは有益有効な情報については、今後も共有等して向上に努めたい。

成果と課題：現在、国語の教授能力については、ある程度のレベルを保持していると考えている。ただし、今後、新入生の学力のレベルの問題など考慮するならば、さらなる研鑽が必要であることはいうまでもない。また、平成16年度1年生から、漢字学習の副教材を新しくする。この有効な使用方法の検討は必須である。

社会系グループ

- ・年4回の会合を持つ。(時期の目安は、試験期ごと)
- ・授業内容、方法を相互に検討する。

実施状況・成果・評価：予定通りには行かなかったが、前期後期1回ずつ社会系グループの会合を開催した。歴史1と倫理との間で重複した内容の調整について議論した。

また、5年生の選択科目(応用倫理学、法学、歴史特論)の授業内容を各自が報告し、お互いの科目の理解が高まった。

課題：来年度は、新任教官の科目を中心に、授業の内容・方法について検討する。
- ・資料を持ち寄り、検討を加える。
- ・機会を見て、相互に授業を参観する。授業方法を検討する。

実施状況・成果・評価：「日本国憲法」の授業を全員が参観するとともに、授業の配布資料を持ち寄り意見交換した。

課題：授業を参観する機会を増やすように努力する。

保健・体育グループ

- ・以前から授業内容、方法について、会合を持ち、検討していることをふまえて、定期的な会合の開催、授業内容、方法の改善に取り組む。
- ・授業改善
 - 教材の選定

ソフトボール・バレーボール(他の教材に比べ能力差が大きいことについて)

原因と対策：プレイしたことがないことが1番であり、特にソフトボールは中学校の教材になく、遊びのなかでもあまりやったことのない層の学生が含まれている。

低学年ではすぐにゲーム形式が取れないことが多いので、導入部で基本的な動きを取り出し分習形式で行う。

評価：基本的な動きを幾つか取り出し分習することによって、それぞれの教材の大まかな形を理解できるようになりゲームの様相も向上を見た。

課題：まだまだソフトボール・バレーボール嫌い(運動嫌い)の層ははっきりしているが、将来職場および社会体育で最も用いられる種目でもあり教材として取り上げて行きたい。そして、根本的にソフトボール・バレーボールの楽しさを指導して行きたい。
- ・授業方法
 - 体育実技での欠席・見学者の扱いについて

現状：気候・天候状況、教材、授業形態などによって"サボリ"学生がでる。サボらないよう指導したにもかかわらず、これまで以上に目に付いた。

原因：運動嫌い、気力低下、体育の服装忘れ、睡眠不足、無関心、その他

対策：これまで欠席・見学について特に何も課することをしなかったため、何らかの対応を検討したい。

無関心・無気力の学生に対し興味を持つ授業方法の工夫と、保健などの授業を通して、コンディショニングづくりと日常生活のあり方を指導したい。

「運動嫌い」に対する指導は体育の最終目標であるが、身体運動の必要性を地道に説得し、まだ未体験と思われるスポーツの爽快感を体感できるよう工夫したい。

・定期的な研究会・指導打ち合わせの会の開催

実施状況：3人の常勤教官の会合と、非常勤の先生から様子や問題点を聞く形態の2種類で行った。

成果・評価：授業間の連携や教材選定における統一性の面で向上があった。

学生観察の情報量が増え、個々の指導に生かされた。

非常勤の先生(ある意味外部)から見た高専学生の指導ポイントと言う点で大いに参考になった。

課題：会合の回数はこれまで以上になったが、なかなか時間設定がうまく行かず、特に放課後の時間などは、それぞれにクラブ指導などがあり、さらに校務分署の委員会などが入ることにより定期にできなかった。今後さらに工夫したい。

3. 中学校教育との連携方策

・中学校の指導要領を検討する。

実施状況：これまでも教科によっては中学校の指導要領および教科書を取り寄せて、検討していたが、中学の新指導要領の適用を受けた学生が入学するようになったことにより、第1学年の国語、英語、倫理、地理などに関連する分野について検討した。

課題：新年度は第2学年の歴史などの分野について検討して行く。

総括的な評価と課題

計画をたて、実施を進めたが、達成度は教科によって差異がでた。手広く計画をたてるのではなく、計画をしぼり、必ず実施する努力が求められる。

専攻科

1. 外部講師による講演会の開催

- 1.1 教官・学生の意識改革：卒業生による講演会（H15年9月頃までに実施したい）
（企業における意識改革：ユースコンサルティング 社長 平田氏を予定しているが、別途、旭化成の人事担当者も考えている）

この講演会主催を、専攻科教育委員会として実施する。

「ベンチャーマインド養成セミナー」を10月22日～1月27日まで合計8回のセミナーを開催し、教職員への参加をメールや新居浜高専校報により募るが、参加者は専攻科教育委員のみであった。課題として、教職員へのPR方法の検討とともに学内講演会の開催時期などの調整も必要かと思われる。

- 1.2 愛媛オリジナル「微生物による環境浄化について」

対象：本校教職員、専攻科生、本科生(できれば5C、4C)

講師：愛媛県工業技術センター 所長 曾我部 氏

開催時期：日程調整を検討中。

（環境保全委員会と専攻科教育委員会との共催）

実施することができなかった。学内における講演会の開催時期が特定の時期に集中し、日程調整が困難であったことが課題である。

2. 学内講演会

- 2.1 専攻科生を対象として講演：講師 校長先生

専攻科1年生：「専攻科生の学生生活について」(平成15年7月頃)

専攻科2年生：「専攻科修了後……」(平成15年11月頃)

校長先生により、専攻科1年生：「専攻科生の学生生活について」(平成15年7月)に実施して頂き、学生の感想レポートに対する丁寧な個別指導をして頂き感謝しております。

専攻科2年生については、実施時期の設定と公務が重複し、実施できなかった。課題として、年間行事計画の日程調整が必要である。

- 2.2 専攻科生と対象とした講演：講師 専攻科卒業生

[1]「専攻科修了OBから見た専攻科生」等の題目による講演。

実施時期および講師については、現在、検討中である。

「ベンチャーマインド養成セミナー」を10月22日～1月27日まで合計8回のセミナーを開催し、教職員への参加をメールや新居浜高専校報により募る。専攻科生及び専攻科教育委員による講演の評価は高い。

3. 平成16年度開催予定である「中四国地区専攻科生研究交流会」の準備を行う。

- 3.1 学生の準備委員長、委員を選出し(平成15年6月末)、運営方法、会場、宿泊、ホームページの立ち上げなどを検討するとともに、準備用資金の校長裁量経費申

請を行う。平成16年2月中旬には、中四国の専攻科へ案内状の発送を行う。教官の準備委員長は、池内主任である。

平成16年度4月22日開催を目指し、その準備は着実に進行している。

学生側の実行委員長として、三木江一都君が選出された。

予稿集作成費用が校長裁量経費に採択され、予稿集原稿を3月24日に印刷所へ渡す。

4. 専攻科履修要覧の大幅な改訂を行う。

4.1 専攻科生に対する校長先生からのメッセージを入れる。

4.2 教育目標及びその達成方法を分かり易い表現で記載する事を検討する。

4.3 学生にとって利用しやすい履修要覧の作成を目指し、資格取得、学外実習の意義、企業との交流、学会発表等の研究活動の状況、学位申請へのスケジュールなどを入れる。

4.4 原案の作成を6月中旬頃までに行い、7月上旬までには配布したい。

以上の4項目については、配布計画予定日から約2週間程度遅れて配布した。学生にとって分かり易く、利用し易い専攻科履修要覧を作成することができたことは評価できる。さらに、学生にとって利用し易い履修要覧を目指し、今年度末、内容の見直しを行っている。

5. 専攻科シニア・インターンシップ(学外実習)の奨励

5.1 6月の運営会議において、その実施要項の了解を得る。

5.2 専攻科1年生の希望者及び実習可能な企業リストの作成を行い、実施する。

専攻科1年生、7名のシニア・インターンシップを実施できた。

課題は、従来とは異なった観点から、新たなシニア・インターンシップを策定し、実施に向けて努力したが、各学科との共有化が不十分であったことである。

6. 専攻科基礎科目担当部会を立ち上げる

6.1 英語教育特別推進室：高橋先生(中川へ変更)を主軸に、5月より活動を始めている。さらに、学内に設置された英語教育改善WGとの連携を図る。

6.2 数学教育特別推進室：柳井先生を主軸に、6月中旬より活動を始める。月1回程度の打合会を開催する。

前期において、英語担当教官と“TOEIC: 400”達成を目指した長期計画について議論を行い、原案を作成した。さらに、“英語学習支援用ソフト”の申請を行う。生産工学専攻より生物応用化学専攻が分離申請を学位授与機構へするため、数学担当教官との連絡会を実施し、カリキュラムについて見直しを行うと共に、新設科目を設けた。

後期において、英語担当教官として新採用された外国人講師の長所を活かした教育方法などについて議論を行い、実施した。専攻科基礎科目である数学英語の専攻科入試における必要性の見直しを数学担当教官及び英語担当教官と実施した。学生が“TOEIC IP”試験を受験しやすくするため、“TOEIC IP”試験の法人会員になる申請が採択され、本年度末に実施される。

総括的な評価と課題

1. 外部講師による講演会の開催

1. 1 教官および学生の評価は高い。
1. 2 課題として、各委員会において開催される講演会との日程調整が問題である。
ある時期に集中するため、学校全体における日程調整を行う場が必要である。
2. 学内講演会
 2. 1 教官の評価は高い。
課題として、各委員会において開催される講演会との日程調整が問題である。
ある時期に集中するため、学校全体における日程調整を行う場が必要である。
3. 平成 16 年度開催予定である「中四国地区専攻科生研究交流会」の準備
 3. 1 専攻科 1 年生と関係教職員との協力により、順調に準備は進んでいることは評価できる。 中国四国地区専攻科生研究交流会のポスターを企業や官公庁へ掲示し、専攻科生の活動を PR したい。
4. 専攻科履修要覧の大幅な改訂を行う。
 4. 1 学生にとって分かり易く、利用しやすい専攻科履修要覧を作成することができたことは評価できる。
5. 専攻科シニア・インターンシップ(学外実習)の奨励
 5. 1 専攻科 1 年生、7 名のシニア・インターンシップを実施できたことは評価できる。
課題は、従来とは異なった観点から、新たなシニア・インターンシップを策定し、実施に向けて努力したが、各学科との共有化が不十分であったことである。
 5. 2 来年度、専攻科 1 年生の全員によるシニア・インターンシップ実施に向けて官公庁および企業への依頼活動を実施している。各学科との協力体制を作ることが課題である。
6. 専攻科基礎科目担当部会を立ち上げる
 6. 1 専門基礎科目担当教官との連携を図る会合を立ち上げ、専攻科生の基礎力向上を目指した実施計画を作成し、運用することができた点は評価できる。
しかし、全学で継続的な組織運営のシステム作りが課題である。